

連載企画—音の博物館—

発声する口琴*

下村五三夫 (北見工業大学)**

口琴は奏者自身の口腔を唯一の本来的共鳴器とする地球規模の分布を持つ音具です。製作素材には、竹木片、骨角片、薄い金属片などがあります。日本では江戸時代にビヤボンという名の鉄口琴が大流行しました。現在北海道のアイヌ民族にムックリ mukkuri という竹口琴があります (図-1 上)。音具全体を横向きに唇にあてがいます。紐を瞬発し弁を震わせ、その原雑音を奏者の口腔に誘導します。口笛を吹くときのように舌を動かすと、ブンブンという原雑音は口腔の容積変化の効果を受け、元の音色と旋律を変えてゆきます。

口琴には音響学の視点から興味深い伝承や報告が付随しています。それは「口琴は人の声を生み出す」というもので、シベリア、樺太、日本、中国、台湾、果てはハワイにまで及んでいるのです。口琴で発声するには、アイヌ口琴の名称“ムックリ”と江戸期の口琴練習譜の章句“ノドモトラエテ”が役立ちます。mukkuri は‘閉じ喉の楽器’を意味します。ノドモトラエテは‘喉を閉じて’を意味します。この二つが教えるとおりに、声帯を閉じ合わせた態勢のまま口琴の一次雑音を口腔に響かせ、同時に無言調音運動を行うと原音は瞬時に声に変わります。琴体を横向きに唇にあてがい、右端の角を弾きます。パントマイムで例えばデ・ワ・ド・ンと調音器官を動かします。ビーンという原音が調音運動に同期して [de・wa・do・n] という声に変わるでしょう。江戸時代の文献によると、ビヤボンでデワドンという声を出したようなのです。また樺太のアイヌ民族にはレクツカラ rekukkara という喉ゲームがありました。女性二人が向かい合って座り、口と口をそれぞれの両手で作ったメガフォンで連結します。一方が自分の喉声を向かいの女性の口腔に送り込み、受け手がその声を口



図-1 アイヌ民族の竹口琴ムックリ (上), 音声合成に優れた黄銅製口琴 (中), その収納筒 (下)

腔容積変化により変調します。もしも受け手が自分の声帯を閉じ合わせ、無言調音運動を実行すると、投入される喉声は受け手の口腔内で別の声に変換されます。口琴の起源は「様々な雑音を声帯が閉じられた自己の口腔に響かせ、それを無言調音運動によって別の音声に変える習俗」にあったのではないのでしょうか。

文 献

- [1] 下村五三夫, アイヌ発声口琴習俗の研究, 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構助成出版(ノースアカデミー, 北見, 2004).
- [2] 下村五三夫, 根本 愼, 矢萩悦啓, “摩擦音を音源とする人工喉頭について—北宋の“類叫子”挿話に示唆を得て—,” 北見工業大学人間科学研究, 3, 21-66 (2007).
- [3] 下村五三夫, 伊藤大介, “樺太アイヌの喉交換遊びレクツカラについて,” 北見工業大学人間科学研究, 4, 13-62 (2008).
- [4] 下村五三夫, “北東ユーラシアに見られる口腔共鳴音具による発声風習について—アイヌ口琴ムックリと喉交換遊びレクツカラ—,” 信学技報, SP108(116), pp. 83-88 (2008).

* Speaking Jews-harps.

** Isao Shimomura (Kitami Institute of Technology, Kitami, 090-8507)